

古事記上卷抄

210.3

Ke 19864

IIIV

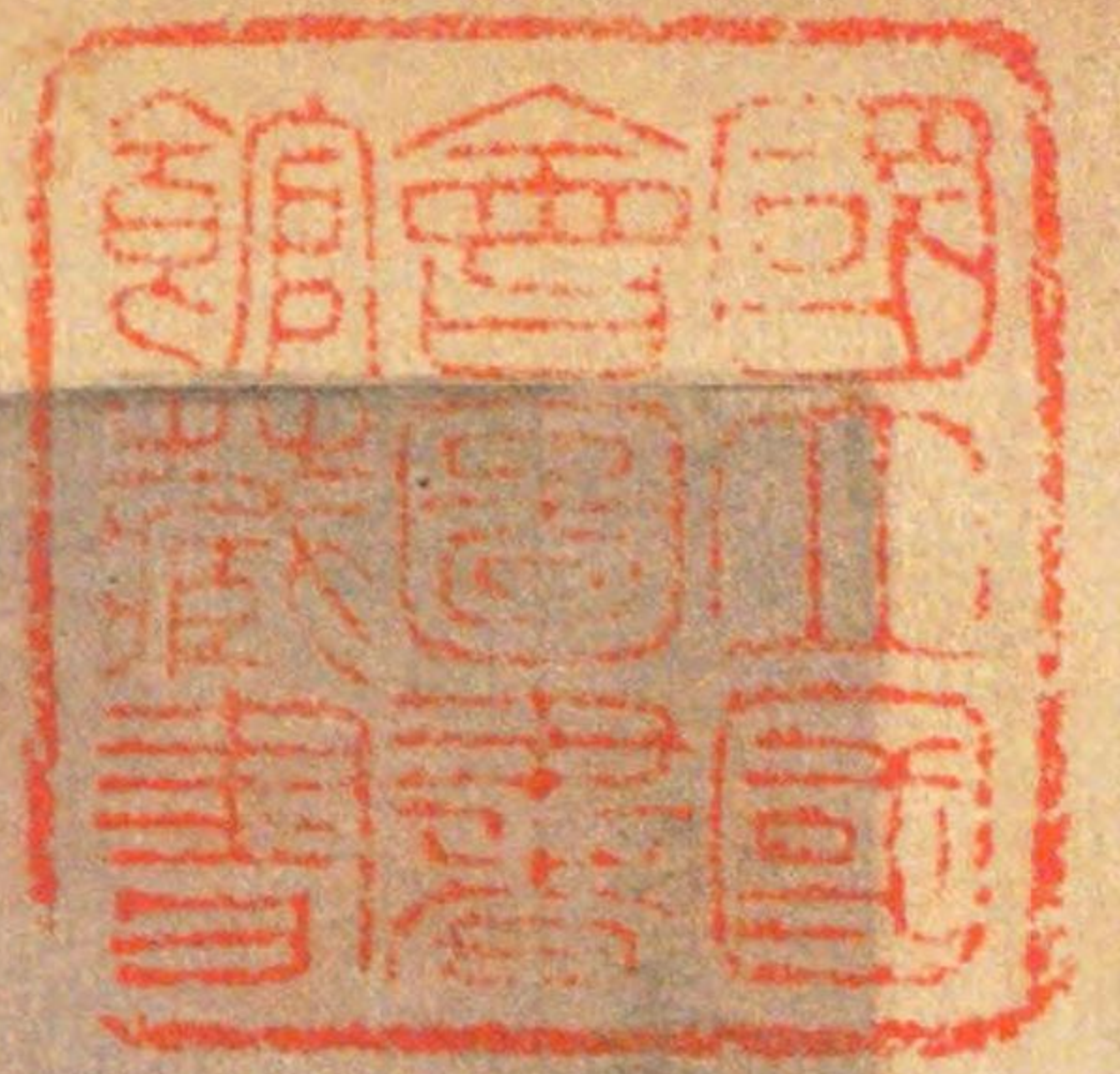


225581

210,3Ka 698^{II}₄







古事記上卷本

第六拾六卷

尾張國天須

寶生院藏

古事記上卷抄

天照大御神者吉爾思金神及諸神

白之坐天安河之上之天石室名伊都之尾羽

張神是可遣伊都ニモシ若急非此神者具神之子

建御雷之男神此應遣且具天尾羽張神者

送塞上天安河之水而塞道居故他神不得行

故別遣天迎久神可問故尔使天迎久神問天尾

一

一

小... 申天... 珠加信... 巴漢... 律古

羽... 神之時... 吞白... 怨之... 仁奉... 然於... 此道... 者... 僕... 子

建... 淵... 雷... 神... 可... 遣... 乃... 貢... 進... 尔... 天... 鳥... 船... 神... 副... 建... 淵... 雷

神... 而... 遣... 是... 以... 此... 三... 神... 降... 到... 出... 雲... 國... 仔... 非... 佐... 之... 小... 濱

而... 校... 十... 掬... 鈎... 逆... 刺... 立... 于... 浪... 德... 跌... 坐... 具... 鈎... 前

問... 具... 大... 國... 主... 神... 言... 天... 照... 大... 神... 高... 木... 神... 之... 命... 以... 問

使... 之... 汝... 之... 字... 志... 波... 林... 流... 葦... 原... 中... 國... 者... 我

御... 子... 之... 所... 知... 國... 言... 依... 賜... 故... 汝... 心... 奈... 何... 尔... 吞... 白... 之... 僕

者... 不... 得... 白... 我... 子... 八... 重... 言... 代... 主... 神... 是... 可... 白... 然... 為... 鳥... 遊

取... 臭... 而... 大... 隸... 之... 前... 未... 還... 米... 故... 尔... 遣... 天... 鳥... 船... 神... 薇

... 申天... 珠加信... 巴漢... 律古

米八重事代主神而問賜之時結其文大神言

怨之此國者立奉天神之律子即踏傾其瓶而

天送予矣於青柴垣打成而隱也故尔

問具大國主神今汝子事代主神如白訖亦有

可白予予於是赤白云亦我子有建律名方神

除此者無也如此白之間具建律名方神分別

予末而恭言誰來我國而忍如此物言然欲為

力競故我先欲取其律予故令取其律予者即

取成立冰之取成鈎刃故尔懼而退居尔欲取其建

取成立冰之取成鈎刃故尔懼而退居尔欲取其建

取成立冰之取成鈎刃故尔懼而退居尔欲取其建

於曾良久改

佐利方津留信之

佐加人知余

阿於布之

加波於予知余之臣

加礼可奴

訖柴云

布斯

申信攻

サナ スニ

知加良阿良曾仔

於津

志利曾改作留

有志乃知波於

上利

御名方神之乎乞歸而取者如取若葦楹柢而捉有志乃和波柢

離者即逃去故追往而迫到神科野國之州羽海仁氣 左留 仁介 仔太留

將致時建御名方神白怨莫致我除此地者不申中 申中 申中

行他處亦不違我父大國主神之命不違八重事申中 申中 申中

代主神之言此葦原中國者隨天神御子之命乃給仁毛

獻故更且還未洞具大國主神汝子等事代主先里大天方津留信志 加倍利 乃字天

神建御名方神二神者隨天神御子之命勿違申中 申中 申中

白訖故汝心奈何尔吞白之獵子等二神隨白申於波字奴 申中 申中 申中

儀之不違此葦原中國者隨命既獻也唯毛 大知伊方津良之 申中 申中 申中

7 MID-106

篠狂乃者ニノノ加天神御子之天津日彥ニギハヤヒ所知之登

陸流

此三字以音下致此

和銅五年正月廿八日正五位上勳五等太朝臣萬倍ヤスヒ撰

諏方杜事

先代舊事本紀第三曰經津主武甕槌ニギハヤヒ二神降到

於出雲國而問大己貴神曰天神勅曰葦原中國者

我御子之可知之國汝將此國奉天神能大己貴命對

當問我子事代主神然後將報去事代主神謂其曰

我父直當奉避吾亦不可違。今問大已貴神亦有可
白之子予對曰必白之且我子有建德名方神除崇無
也如此白問建德名方神予引之石指捧手末而
米言誰米我國而悉如此言者然欲為力競故我
先欲取其德予故令取其子者即此水亦取成
鈎。到於神野國州羽海之時建德名方神白我
除此地者不行他處亦不違我父大國主神之命
不違元八重事代主神之言此葦原中國者隨天
神德子今獻矣。

不違元八重事代主神之言此葦原中國者隨天
神律子命獻矣

又第四日建律名方神坐信濃國諏方郡諏方神
社

先代舊事本紀聖德太子并馬子大臣所製也

眞福寺本古事記上巻抄解説

眞福寺本古事記上巻抄は、初に古事記上巻抄と題して、古事記中、建御雷神、神勅を奉じて出雲に降り、建御名方神の命を奉ぜざるを追うて諏訪に到り、遂に大國主神をして國を譲り奉らしむるの一節を抄出し、次に諏訪社事と題して、同じ事實を記せる舊事本紀の文を抄出せるものにして、蓋諏訪神社の祭神建御名方神の事蹟を集録せるものなり。されば、之を古事記上巻抄と名づくるは穩當ならざるが如しと雖、この書の表題（本文と同筆ならん）にも、又本文最初の紙端裏面の外題（本文と同筆）にも共に古事記上巻抄とあれば、その名因襲久しきを見るべし。編者及筆者共に詳ならず、書寫年代亦明に知る事能はざれども、書風用紙等より觀れば、恐らくは鎌倉末期なるべく、遅くも南北朝を下らざるものなり。現に存する古事記の諸本は應安四年及五年の寫本を以て最古とし、舊事紀の諸本は更に之を下る事遙に遠きもののみなれば、この書に抄出せる古事記及舊事紀の文は僅に一節に過ぎざれども、年代の古き點に於て兩書の古本に比して優るとも劣らざるものにして、その本文研究には逸すべからざる資料たり。加之、古事記の文には傍に假名及萬葉假名にて訓を附し、朱にて乎古止點返點及一符を附したれば（朱は寫眞には色淡くあらはれたれば墨と區別し得べし）その古訓を知るべく、古事記訓法の研究にも亦有力なる資料たる事學者の齊しく認むる所なり。

この眞福寺本は、名古屋市寶生院の所藏にして、卷子本一卷、白楮紙の表紙をつけ、紐なく、軸は赤地金欄をもつて包めり。紙幅九寸五分強、表紙は中七寸、表題を墨書し、その下方に別筆にて、第六拾六合と書せり。本文は十八行の黒界（界の高七寸五分五厘）をひける白楮紙三紙と四行に書寫し（但、最後の一行のみ空白）、終に禮紙一枚を附せり。卷頭に寺社官府點檢の印あり。裏面にも同じ檢印あれど、裏面はすべて裏打を施したれば、その印も、又本文最初の紙端裏面上方に本文と同筆にて古事記上巻抄とある外題（表紙の寫眞の右端上方にかすかに見ゆるもの是なり）も、皆その下に隠れたり。

本書をはじめて學界に紹介せしは石原正明にして、年々隨筆卷五（文化元年九月成）の中、日本紀及古事記の訓を論じたる條に、本書に抄出せる古事記の全文を掲げたり。然るに、その後、本書を眞福寺本古事記と混同して、同書には訓なきに正明が訓ありと云へるを疑へるものありしが、明治十五年井上頼園氏寶生院に到りて本書を見、書寫して歸り、その疑の故無きを明にせり（已亥叢說上、古事記の條、又は古事記者、眞福寺本の條參照）。但、本書が諏訪神社關係の古記の文を集録せるものなるは、未だ何人も説かざりし所なりとす。

本書は嘗て刊行せられたる事なく、寫本亦稀なるが、寫本は皆眞福寺本より出でたるものなり。

大正十三年八月

橋本進吉識



大正十三年十月廿五日印刷
大正十三年十月廿八日發行
東京市下谷區上野公園字東園
發行兼印刷者 古典保存會
右代表者 七條 愷
東京市神田區小柳町鐵道拱下壹號地
印刷所 金屬版印刷所
東京市神田區小柳町鐵道拱下壹號地
會費及配本 古典保存會假事務所
取扱所 振替口座東京四四九四八番



水	火	月	日	土	金	木	木
<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>
<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>	<p>あ ら ま の な ま</p>

六月

あ
ら
ま
の
な
ま

あ
ら
ま
の
な
ま

あ
ら
ま
の
な
ま

あ
ら
ま
の
な
ま

昔つものしらね

昔つものしらね

昔つものしらね

昔つものしらね

昔つものしらね

昔つものしらね

昔つものしらね

よりりいわりーやまのりか

あふるいんふさあつたあふる

あふるいんふさあつたあふる

あふるいんふさあつたあふる

あふるいんふさあつたあふる

あふるいんふさあつたあふる

あふるいんふさあつたあふる

あふるいんふさあつたあふる

元應元年正月百

昔つものね
きん

昔つものね
きん

昔つものね
きん

昔つものね
きん

昔つものね
きん

昔つものね
きん

かじ日 ちる日 しろ日 やまの公と日

船
かじ日

船
ちる日

船
しろ日

船
やまの公と日

船
かじ日

元應元年正月百

元弘三年十月廿二日

秋

○ 點河侯

連子

耐乃名

幸

南

連序

耐力者とて

きつらる本意は

奉しつらるに

月しつらるに

月しつらるに

きくかく結はぬ

ひしつらるに

しつらるに

かきつらるに

さつらるに

房とあとの

ゆつらるに

危のち

らつらるに

ひしとのいんじ
からまやくか
かまじしり
さひいあま地
房とふおとのき
ゆつていし
たのちかしら
らさやいゆん
りらとて花力
かふゆりいり
あ

元弘三年十月廿二日

書

○點河侯

連子

耐乃名

本

車

連号

耐乃名をいとし

まにらる本或は叶

奉しりつらに

月しししてす

びししししし

まくさく枯けぬ

ひししのこさ

ららるやさく

かましししし

さひしししし

房とふれとの

ゆつてしし

危のちかしし

らるやいゆん

ひしとのいんせ
らまやくか
かまじしりり
さひいあ地ぬ
房とふれとのき
ゆつていし
たのちか
らさやゆい
りらとて
わふゆり
あ

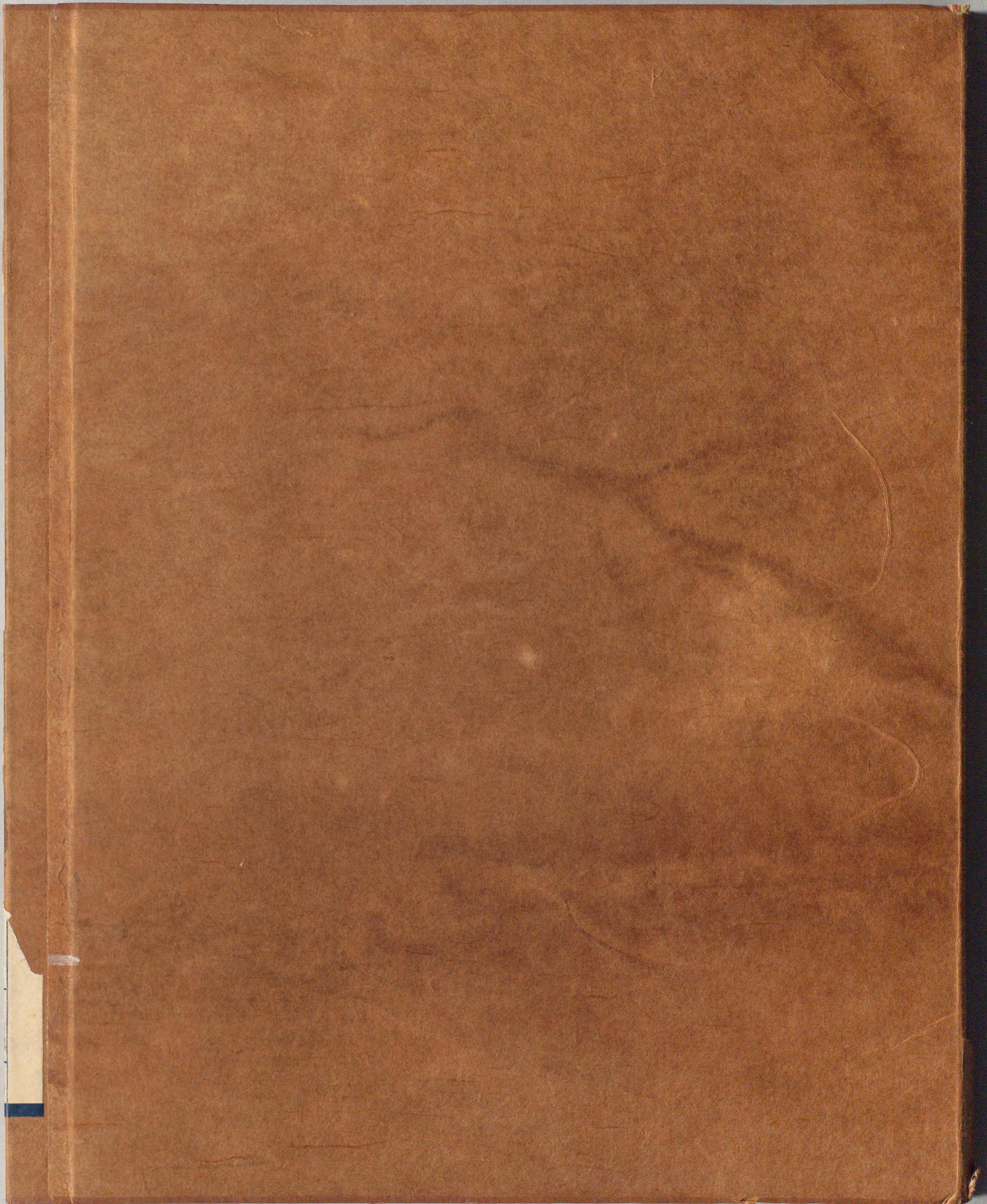
古事記 上卷抄

210.3
Ko698k4
II (W)

210.3-Ko698k4



1200500490085

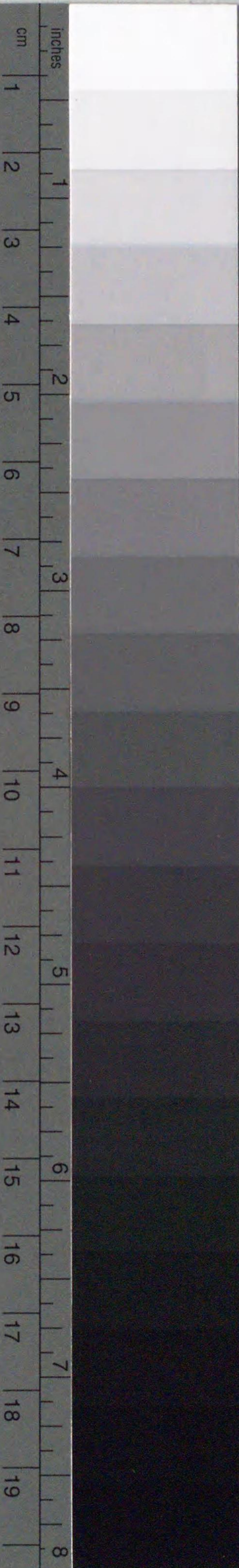


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

